



『精神神経学雑誌』への投稿論文のなかに、質的調査（量的調査との併用を含む）がみられるようになってきた。精神科領域に限らず医学系の論文は、原著のくりに相当するならば、ほぼほぼ量的調査と感じていたが最近はずしもそうではない。もちろん質的調査は量的調査と区別するための総称であって、その内訳はさまざまである。とはいえインタビュー、フィールドワーク、ドキュメント分析の3つは基本的な方法といえよう。おのおの聞き取り、参与観察、言説分析と同義かそれに近い。これらのうち“みられるようになってきた”のはもっぱらインタビューである。

その大きな要因の1つにZoomなどのオンラインビデオ会議システムの普及が挙げられよう。しかし、オンライン型の調査は、それまでインタビューの主流であった、対面型の調査と区別される必要はないのだろうか。両型の異同に関してはコロナ禍以降、医療や教育からビジネスに至るまで、オンライン型の広まりと軌を一にして、対面型と比較する目的で多くの調査がなされてきた。しかし、診療、授業や営業活動においてはオンライン型による変化があったとしても、やはり有効性が主たるテーマなのであり、方法上の異同は副次的な話題にとどまる面が否めない。つまり筆者は（調査目的としてではなく）調査方法として、オンライン型と対面型はどこまで同じといえるかについて考え込んでいるのである。

当然とはいえ、インタビューは質問-回答形式の相互行為が中心となる。しかし、そのような人間関係は日常的でなく、現実には学習や選抜などかなり限られた状況にしか現れない。こうした非日常性を質的調査のデータが含むというバイアスはかねてから指摘されてきた。フィールドワークよりもインタビューが用いられる現況においては、対面型でさえ言及されるこの非日常性が、オンライン型という手続きによって強まることは想像にかたくない。よしんばオンライン型に研究者がすっかり慣れたとしても、調査の内容や対象者によっては、そうした非日常性が緩和されるとは限らない。グループインタビューとなればさらに気がかりである。グループダイナミクスを用いる質的調査にとって、パソコン画面上に同じ方向をむいて並んだ複数の顔がグループといえるだろうか。個別インタビュー以上

にオンライン型が内包する壁は無視できない。

もっと言えば、そもそもインタビューする人-される人の間にインターネット経由のプラットフォームが入り込むのはどうなのだろう。疾病や障害にかかわる生きづらさといった、機微に触れるインタビューであればなおさらと思わざるを得ない。まして、質的調査は問題を解決するためのみならず、潜在する問題を見出すためにも行われる。もし自由な語りが十分に得られない疑いがあるならば、調査方法としての根幹にかかわる。

一方で、質的調査が抱えてきた“自分が足を運びやすいところ”にいる人を対象者に選びがちという、対面型における偏りをオンライン型は少なからず解消することとなった。ひとたび体得すれば、時間・場所といった物理的な制約はもちろん、移動に伴う交通機関・天候への気がかりなどから解放されるオンライン型の長所は捨てがたい。ただし、その恩恵に浴するにあたっては対面型の個々の質的調査が、例えば自らは地域差に大きな影響を受けていないと、あるいはその場所に絞ったデータであると但し書きするように、オンライン型においてもこれを選択したことによる影響の有無が付記されると好ましい。

そうしたオンライン型の“距離を問わない”性質から、遠方にはオンライン型、近場には対面型のアプローチが1つの研究内で異なる対象者へ（横断的に）用いられる、あるいはコホート研究において同じ対象者へ（縦断的に）使い分けられるという可能性が想定される。いかなる質的調査の条件下でオンライン型と対面型は——研究で比較できる程度に——同等とみなせるか、違いが無視できないのはどのような場合か、その違いを緩和するにはどうするかといった議論がこれまでに増してなされるべきであろう。

当初はコロナ禍における代替手段としての色合いが濃かったオンライン型の質的調査だが、いまや対面型に近い選択肢となりつつあるようにみえる。今後は好む・好まざるにかかわらず、オンライン型をうまく取り入れて質的調査はさらなる発展をめざすこととなろう。オンライン型と対面型における方法上の異同をわきまえた調査の蓄積が望まれるし、筆者もその実現に向け微力ながら尽くしていきたい。

大西次郎